

紫式部日記

「二月ばかりのしだり柳」考

本 田 義 彦

平安時代のすぐれた閨秀作家、源氏物語の著者紫式部には、有名な日記が残されているが、その紫式部日記の後半部分の「この次に」から「十一日の暁」の記事の前までは、所謂「消息文の混入」だと言われている部分である。消息文混入の問題については、古くは足立稻直、藤井高尚、清水宣昭などによって、その消息文的性格が指摘され、明治に入ってから中根秀亭、木村架空ら、さらに関根正直、池田亀鑑、西下経一らによってその混入説が引き継がれてきたのであるが、それには反対論もあって、星加宗一、岡一男、今井卓爾、小沢正夫らがその反対論者である。しかし、この消息文混入の問題はしばらくおくとして、その所謂消息文の部分には、和泉式部・清少納言を始め、当時の女房たちに対する紫式部の興味ある人物評論が数多く書かれている。その女房たちの一人に「小少将の君」があって、その文章は次の如くである。

小少将の君は、そこはかとなくあてにまめかしう、
二月ばかりのしだり柳のさましたり。やうだいいとう
つくしげに、もてなし心にくく、心ばへなども、わが

心とは思ひとるかたもなきやうに物づつみをし、いと世をはぢらひ、あまりに見ぐるしきまで兒めい給へり。腹きたなき人、あしざまに、もてなしひつづぐる人あらば、やがてそれに思ひ入りて、身をもうしなひつべく、あえかに、わりなきところつい給へるぞ、あまりうしろめたげなる。

(日本古典文学大系本 紫式部日記 四八七頁)

右の本文中「二月ばかりのしだり柳のさましたり」という譬喩的表現の部分があるが、その解釈が、諸註釈書類のすべてに不充分だと思われるので、そのことについて一言したい。

まず、この「二月ばかりのしだり柳のさましたり」の部分についての、諸註釈書類の説明を列記してみよう。

紫式部日記解(足立稻直) 文政二年(一八一九) 成立 国
文註釈全書一四五頁

「わりなき処」 此詞は物を強て為るやうの意にて心底の

よからざる人此君に難つけ悪き名をも云着なとせは其儘深く思ひしつみてさまてなき事にもいひ消ケチなともえせずしひて心を其方におもひ入て身をもうしなひつへきさまそといへるにてその物ことに人のいふまゝに逆らふ事なくよなよよとしたる本性を二月のしたり柳のさまに譬へたるなり是らの心もちひそ大かた御許の心にはかなひしならむさてこそむつまじきましらひにはありけめ

紫式部日記註釈（藤井高尚・清水宣昭）天保四年（一八三二）刊 国文学註釈叢書六九四頁

「二月ばかりのしだり柳」若菜下巻に、女三宮の御さまを申す所に、「人よりけにちひさく……中略……あへかに見え給ふ」とあり。いづれもあへかなるさまなり。紫式部日記講義（三木五百枝）明治三十二年（一八九九）刊 一七二頁

「二月ばかりの垂柳」二月頃の垂柳は、細やかに芽の出で、極めてなよやかなる物なれば、力なくなよよとしたるさまを譬へたるなり。

新訳紫式部日記（与謝野晶子）大正五年（一九一六）刊 一〇四頁

（口訳）二月頃のしだれ柳のやうである。紫式部日記評釈（永野忠一）昭和四年（一二二九）刊 一五四頁

（口訳）例えて見ると二月の頃の垂柳のなよよとして美しい様な人だ。

「しだり柳の」下に「なよよとして美しき」を補入。紫式部日記全釈（小室由三）昭和五年（一九三〇）刊

一七六頁

（口訳）二月頃のしだれ柳のやうな感じのする人である。「しだり柳のさま」力なくなよよとしたさまの譬。

評訳紫式部日記全釈（阿部秋生）昭和二十四年（一九三九）刊 一八一頁

（口訳）二月頃の枝垂柳のやうな様子をしてゐる。「二月ばかりのしだり柳」舊曆二月といへば春も漸く盛りにならうとする頃で、柳の芽も大きくなり、早ければ葉が少し出て来る頃である。

紫式部日記新釈（曾沢太吉・森重敏）昭和三十九年（一九五四）刊 二九五頁

（口訳）二月ごろの枝垂柳のような様子をしています。「二月ばかりの枝垂柳の」「宮の御方を覗きたまへれば人よりけに……中略……御ぐしは左右よりこぼれかかりて、柳の糸のさましたり。」（源氏 若葉下）。「白雪花繁空撲地、緑糸条弱不勝鶯」（白氏文集 楊柳枝詞）紫式部日記（中野幸一）昭和四十六年（一九六一）刊 日本古典文学全集 二二六頁

（口訳）たとえば二月ごろのしだれ柳のような風情をしています。

「二月ばかりのしだり柳のさま」小少將の君については、前にも好意と同情とをもって記されていたが、ここではこの薄幸の美しい友の容姿を「二月ばかりのしだり柳のさましたり」と、まことに繊細な比喩で表現している。このような比喩表現は他の女房の批評には見られないもので、この点からも式部の小少將に対する厚情が知られる。

う寺司の発想を自加してゐるのである。そういえば『紫

るが、いっぽうこれと同様な表現が「源氏物語」の若菜巻下における女三の宮の容姿の形容に用いられていることは、女三の宮像と小少将の君の類似性を示すものとして注目すべきことである。

紫式部日記全注釈（下）（萩谷朴） 昭和四十八年（一九六三）刊 一六五頁

（口訳）仲春二月頃の枝垂柳といった風情をしている。

「二月ばかりのしだり柳のさま」紫式部は、親友小少将の君に対する評言には、格別に配慮して美的効果のある表現を用いている。「註釈」が既に指摘したように、「源氏物語」若菜下に女三宮を描写した「人よりけにち

ひさくうつくしげにて、ただ御ぞのみある心ちす。にほひやかなるかたはおくれて、ただいとあてやかにをかしく（なまめかしくい）、二月の中の十日ばかりの青柳の、

わづかにしだりはじめたらむ心ちして、鶯の羽風にも乱れぬくべく、あえかに見え給ふ。桜の細長に御ぐしは左右よりこぼれかかりて、柳の糸のさましたり」とある文章ときわめて近似している。それが単に、仲春の枝垂柳という譬喩の素材を共有しているのみならず、実線を施した個所がすべて日記本文の小少将に対する評言と一致していることは、既に「新釈」が指摘した通りである。

おそらく『紫式部日記』から『源氏物語』へ移されたものであるが、そこには『紫式部日記』に表現した小少将の君の印象の上に、更に破線を施したところに『白楽天詩後集』巻十二に見える「楊柳枝詞八首」の中の第三首の下句「白雪花繁空撲地 緑糸条弱不勝鶯」とい

ので、この点からも式部の小少将に対する厚情が知られ

る詩句の発想を追加しているのである。そういえば『紫式部日記』の本文に關しても、白詩の第八首「人言柳葉似愁眉。更有愁腸似柳糸。柳枝挽断腸牽断。彼此无续得期」という「愁眉」「愁腸」「断腸」等の用語もたらずニエアンスには、小少将の君の「やがてそれに思ひ入りて、身をもうしなひつべく、あえかにわりなき所付い給へるぞ、あまりうしろめたげなり」という無力感と共通するものが見られる。

以上の諸註釈類の他には、紫式部日記傍註（壺井義知）（一七二九）・紫式部日記講義（長田政孝）（一八九五）

・紫式部日記精解（関根正直）（一九二四）・日本古典全書（朝日新聞社刊）（一九三八）・日本文学大系（岩波書店刊）（一九四八）の紫式部日記などには、この「二月ばかりのしだり柳」については一言もふれていない。

さて、前記の「二月ばかりのしだり柳」について一言でもふれてある諸註釈書を見るに、さすがに一番新しい註釈書であるだけに紫式部日記全注釈（萩谷朴）がもっとも詳細であり、源氏物語との類似点や白氏文集との関係についてはご指摘の通りだと思いが、「二月ばかりのしだり柳のさましたり」という譬喩的表現の部分についての説明は、ほとんどなされていない状態である。口語訳で「仲春二月頃の枝垂柳といった風情をしている」だけでは、具体的に小少将の君のどんな風情なのかはつきりしない。

譬喩的表現とは、たとえば広辞苑（新村出）によると次の如くなっている。

〔ひゆ〕（比喩・譬喩） 物事の説明に、これと相類似

したものをかりてくること。たとえ。「腰に梓の弓を張り、頭には霜を戴く」の類。

さて、この譬喩的表現は、そのたとえられた物の実態・性質を誰かが正確に把握しておくことが前提条件となるもので、その時は誤解も起らず効果的になるであろう。広辞典の引用例でも、「梓の弓を張る」という事実がどんなものであるか知らない者にとっては、腰がどうなっているか分らないけれど、弓のことをよく知っている者にとっては、腰が曲がっていることは直ぐ理解できる。「頭には霜を戴く」も、霜を知らない現代の都会人にはびんとこないかも知れない。なお「花のように美しい人」といへば、花のイメージははなやかなものであるから、はなやかな感じのする人であることが分るが、同じ花でも「水仙のような人」という場合と「牡丹のような人」とではその美しさが違うのである。「水仙のような人」であれば清楚な美しさであり、「牡丹のような人」であれば濃艶な美しさの人が想像されよう。

処で、この「二月ばかりのしだり柳」については、諸註釈書とも、その例えられたものに対する認識が不十分なのである。単なる言葉のおきかえに過ぎないような「二月頃のしだれ柳のやうである」(新釈紫式部日記)だけでは、少少将がどんな人か、その具体的説明にはなっていない。多少でも具体的説明を行っているものは、「あへかなるさまなり」(紫式部日記註釈)、「力なくなよなよとしたさま」(三木五百枝紫式部日記講義・紫式部日記全釈)「なよなよとして美しいさま」(源氏物語評釈)と、わずか四

註釈書に過ぎない。しかも「しだれ柳」の性格としては季節とは関係のない一般的性格にすぎない「あへかなさま」「なよなよとしたさま」とだけしか理解していない。「二月ばかりの」という季節的に限定された条件には、すべての註釈書が気づいていないようである。もともと「紫式部日記講義(三木五百枝)」では、「二月頃の垂柳は細やかに芽の出でて極めてなよやかなる物なれば」と説明しているけれど、枝垂柳の「なよやかな」性質だけをとり「力なくなよなよとしたさま」と理解しているに過ぎない。切角「細やかに芽の出でて」といひながら、その事実が少少将の君のどんな具体的な姿なのかについては何らふれていない。「芽の出でて」いる姿が重要なポイントである。又「紫式部日記全釈」でも、切角「旧暦二月といへば春も漸く盛りになろうとする頃で、柳の芽も大きくなり、早ければ葉が少し出て来る頃である。」と、旧暦二月頃の枝垂柳の実態をかなり正確にとらえているが、その事実と少少将の君とを結びつけることを忘れてしまっている。旧暦二月頃の枝垂柳は「紫式部日記全釈」のいうようなものであろうから、「その若々しくみずみずしい」ということが重要な点である。ただ「なよなよとしていただけなら、わざわざ「二月ばかり」とことわる必要はあるまい。夏の葉の茂った枝垂柳でもなお「なよなよ」という形容にふさわしかろうし、冬枯の枝垂柳であればなお一層「なよなよ」しさが表現できよう。もともと、冬の枝垂柳からは「骨と皮ばかり」とでもいったむしろいたい感じのやせ細った姿が思い浮び、夏の枝垂柳からは細やかな感じはやや薄

最後に、この紫式部日記中の「二月ばかりのしだり柳の

らぐかも知れない。がこの「二月ばかりのしだり柳」からは当然「若々しくみずみずしい」と共に「細そりとなよよとした」姿が想起されなければならぬ。

処で、今一つ考えなければならぬことは、この譬喩は「容姿」に対してか「性格」に対してか、という問題である。私は今までは一応「容姿」に対する形容のつもりで書いてきた。日本古典文学全集の紫式部日記（中野幸一）にも「この薄幸の美しい友の容姿を」「二月ばかりのしだり柳のさましたり」と、まことに繊細な比喩で表現している。』と、はつきり「容姿」ととっている。他の註釈類もほぼ「容姿」ととっているようであるが、紫式部日記解では、前記の如く「その物ごとくに人のいふまゝに逆らふ事なくなよなよとしたる本性を二月のしだり柳のさまに譬へたるなり」と、その性格ととっている。私は直接的には容姿に関する譬喩の語ではあるが、その「あえか」な「あまりにもうしろめたげ」なその性格をもたとえた譬喩の表現であろうと思う。文章はまず「少少將の君は、そこはかとなくあるにまめかしく二月ばかりのしだり柳のさましたり」で始まるが、これは少少將に対する全体からくる第一印象的なものである。そこには容姿と共に性格もかかわっているとみるべきであろう。次に「やうだいいとうつくしげに」と「容姿」についてふれ、続いて「もてなしこころにくし」と「態度」にふれ、更に「こころばへなども云々」とその「性格」にふれている。すなわち「二月ばかりのしだり柳のさましたり」とは、容姿は勿論、態度、性格をもふくめた譬喩的表現とみるべきであろう。

た姿が思い浮び、夏の枝垂柳からは細やかな感じはやや薄

最後に、この紫式部日記中の「二月ばかりのしだり柳のさましたり」の表現については、すでに早く紫式部日記註釈（藤井高尚・清水宣昭）が指摘しているように、源氏物語の若菜下に、女三の宮を形容した部分にそっくりの表現がある。すなわち「二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむ心ちして」とある部分である。処で、源氏物語の古註釈書類を始め、現代の多くの註釈書類で、この問題にふれているものはほとんどなく、ただ「対訳源氏物語（佐成謙太郎）」（巻四・一一一〇頁）（昭和二十七年・一九四二刊）に、「（たとえて見れば）二月の二十日ごろの青柳が、少しばかりみどりの芽をふき出して（それにつれて）枝を垂れはじめたような感じがして、（あのをなよとした糸柳が）鶯の羽風にも乱れるような、それほど弱弱しくお見えになる。」とあってわずかに「あのをなよとした青柳が」とあるだけである。このように「なよなよとした」枝垂柳の一般的性格にふれたものにはあるが、「二月の中の十日ばかり」という季節的条件についてふれた註釈書は一つもない。すなわち「二月の中の十日ばかりの青柳のわづかにしだり始めたらむ心地」とは、女三の宮のどのような状態を具体的にさすのか説明した書は一つもないのである。もともと本文は、「二月の中の十日ばかりの青柳のわづかにしだり始めたらむ心地して」を受けて、「鶯の羽風にも乱れぬべく、あえかに見え給ふ。」と結んであるので「あえか」な状態を示すことは明らかであるが、なお「二月の中の十日ばかり」という季節的条件を無視することはできない。

さて、以上見てきたように、紫式部日記・源氏物語を通じて、どの註釈書も「二月」という季節的条件を無視して、ただ一般的な枝垂柳の「なよなよ」とした性格だけをとりあげているが、ここは当然旧暦二月頃の枝垂柳の状態である「みずみずしさ」「若々しさ」を忘れることはできない。すなはち「小少将の君」や「女三の宮」の様子は、「旧暦

二月の頃の枝垂柳」のように、「みずみずしくて若々しく、またなよなよとしている」と解すべきである。
なお一般論としても、このような譬喩的表現の場合は、そのたとえられた者の性情を正確に把握しておかなければ、正しい理解もなし得ず、誤解を招く恐れがあることを、充分銘記しておくべきであろう。

(本学教授)

自称代名詞「まろ」の性格と変遷

二十六回生 佐野久美子

現代に於ても日本語の人称代名詞は他国のそれと比較して非常に多種であるが、中古から江戸時代には更に様々な人称代名詞が用いられている。人称代名詞は対人関係によつて規制され、それに伴う敬語表現と共に、日本語では重要な役割を果たしてきた。即ち、鎌倉時代以後の封建制度は厳格な身分関係、上下の対人関係を作りあげたために、敬語表現が複雑になり、同時に人称代名詞の数も増加したの

制度の反映とも言え、その生滅の歴史を追うことは非常に興味深く思われる。

である。しかし、我国に於ける身分関係重視の風潮は、何も封建制度の産物ではなく、天皇を頂点とする中央集権体制を確立した古代から平安初期の王朝貴族社会で既に生まれていたのである。つまり、人称代名詞は古代からの社会

そこでまず、人称代名詞の中でも話者自身の立場を直接感じさせる自称代名詞を、『高等国文法新講』『日本文法大辞典』『国語学辞典』により調査した結果、四五種数えられた。このうち、『古事記』『万葉集』『竹取物語』『大和物語』『宇津保物語』『かげろう日記』『源氏物語』『枕草子』『源氏物語』『狭衣物語』『提中納言物語』『宇治拾遺物語』(岩波日本古典文学大系をテキストとする)に現われるものは、あ、あれ、わ、われ、おの、おのれ、おれ、おれら、こち、こなた、わが身、それがし、ま

ろ、み、自ら、身ども、われわれ、わたくしの十八種であ

代名詞と断定するよりも、人名につく接尾語「まろ一との

れて来たのである。つまり、人稱代名詞は古代からの社会
ろ、み、自ら、身ども、われわれ、わたくしの十八種であ
る。ただしこれらは、それぞれ様々な性格を持っており、
すべてが当時自称代名詞として使用されたと見ることは危
険である。

しかし、その中で、『古事記』から『提中納言物語』ま
で時代を通じて全般的に相当数現われ、平安時代以後は明
らかに自称代名詞としての用法に限定される「まる」は特
異であり、興味をひかれる語である。そこで「まる」の変
遷及び性格を検討する次第である。

一 「まる」の古い例について

前に「まる」は時代を通じて全般的に相当数現われると
記したが、具体的には次表の通りである。

作 品	数
古事記	1
万葉集	2
竹取物語	0
古今集	0
土佐日記	1
伊勢物語	1
大和物語	0
宇津保物語	48
かげろふ日記	2
落窪物語	30
枕草子	10
源氏物語	38
狭衣物語	21
提中納言物語	9
宇治拾遺物語	0
計	163

すると、『大和物語』を境として数に差があり、さらに『古
事記』『万葉集』『伊勢物語』『土佐日記』の五例は自称

れ、おれ、おれら、こち、こなた、わが身、それがし、ま
代名詞と断定するよりも、人名につく接尾語「まる」との
関連が強いように思われる。

まず、文献に現われる最古の「まる」は、『古事記』の
歌謡に於けるものである。即ち、

白櫛かに生なに横白よすを作り横白よすに醸かみし大御酒おほみき 甘うまらに
聞きこしもち食をせ まろが親ち

というもので、この「まるがち」の「まる」を自称代名詞
と見て「私の天皇様」と解することも、もちろん可能であ
り、一般的である。しかし、古事記、日本書紀を通じて、
他に「まる」の例がないことから考えると、この「まる」
は、自称代名詞と限定するよりも、人麻呂などといった人
名につく接尾語の「まる」を自称代名詞がわりに用いて親
しみをこめた表現という見方が自然ではないかと思わ
れる。

次に、万葉集の巻十の二〇三三を見ると、「天の河安の
河原に定まりて神競者磨待無」という歌があり、この「磨
を、『万葉集大成』及び『万葉集注釈』では「磨」すなわ
ち「麻呂」と解しているが、これは異説も多く断定し難い。
これに対して、巻九の一七八三の

「松反りしひてあれやは三栗の中上り来ぬ 磨といふ奴」とい
う歌には確実な「まる」が見られる。しかし、残念な
がらこの「まる」が自称代名詞である可能性は甚だ少ない。
むしろ、この場合にも『古事記』の例とは内容が異なるが、
人名につく「まる」との関連が考えられる。つまり、夫の
名が「磨」もしくは「何々磨」だったので妻が愛称のよう
にそう呼んだのではないかという推察である。